



# NEWS LETTER IPPS JAPAN

2009.5  
No.37

International Plant Propagators' Society

## 国際植物増殖者会議日本支部

ホームページ： <http://www.ippsjapan.org>

お問合せ先・事務局  
IPPS 日本支部事務幹事：南出幹生  
〒513-0801  
三重県鈴鹿市神戸7-8-5 南出(株)内  
TEL 059-382-0040 FAX 059-383-6526  
E-mail: head@minamidekk.co.jp

### 琵琶湖でIPPSを開催！

滋賀大会実行委員長  
(有)花街道 代表取締役 佐藤 伸吾



第16回IPPS日本支部の大会は、滋賀で開催することとなり2月より参加者の募集を開始しました。おかげさまで、現在60名余りのお申込みをいただきました。皆様本当にありがとうございます。

開催日は6月27(土)～28(日)、会場は琵琶湖湖岸にありますピアザ淡海(おうみ)です。会場に着かれましたらまずは、琵琶湖をご覧になって下さい。きっと心癒やされることでしょう。

さて、大会初日は特別講演、IPPSではおなじみのお二人をお招きしております。岐阜大学の福井博一教授には、「花育」について講演していただきます。植物と大きく関わっている私たちは、この花育をどのように受け止めていくべきなのでしょう。そんなことを少し考えながら講演を聞いてみませんか？

(株)フラワーオークション取締役の長岡求氏には、「球根のネット購入方法」について講演していただきます。講演中に、海外にあるいろいろな種類の球根を実際にインターネットで購入していただきます。さがしている球根があれば当日購入してみても、いかがでしょうか。

研究発表では、学生の方々の発表や会員の初参加ありで楽しみです。そして、懇親会では、参加者の交流を深めごゆっくりお過ごしください。船から琵琶湖や比叡山、近江富士などの眺めもお楽しみ下さい。

二日目の産地見学は、タキイ研究農場・天然記念物の美し松・(株)高速道路総合技術研究所そして、草津市水生植物公園では、スイレンをぜひご覧になっていただきたいです。

皆様のお越しを実行委員一同こころよりお待ちしております。



ミンガンクルーズ

# ブラックブック 57 巻 (2007 年) について

近畿大学生物理工学部 仁藤 伸昌



ブラックブック第 57 巻を引っぱりだしてみてください。今回は全部の題名の訳ではなく、内容についても少し触れてみます。限られた字数の中ですので、十分な意を尽くすことはできませんが、興味ある記事がありましたら、詳細をお伝えしますので遠慮なくお申し付けください。

☆印は独断と偏見によるコメントです。

☆印の付いた所だけでもご覧いただけるとありがたいです。では、ぱらぱらとページを繰ってみてください。

P-5：5 ページに Richard E. Dick Bir 氏の写真があります。アメリカ東部リージョンの会長ですが、2007 年の名誉賞に推挙されました。ノースカロライナからの人で、大学での研究、普及活動などを通して IPPS に貢献した功績が認められたものです。6 ページ 7 行目以降に彼が書いた論文が掲載された雑誌名が載っています。技術的な内容の雑誌に多く掲載されているのが分かります。IPPS の活動にも積極的に貢献し、まさに IPPS のモットーである 'to seek and to share' を実践した人と評価されています。

P-12：下半分の表は 2007 年の全世界のメンバー数です。2007 年メンバーの数は、2,097 人で 2006 年より 136 人減少しています。日本支部の会員は 61 人で前年より 1 人の減少です。

☆支部として認められ、活動を続けるためには 100 人の会員数がめどとされています。ので、会員の皆様方にご協力いただいて会員数確保の活動をお願いします。理事会などでも話し合っているのですが、多くの会員の協力が必要です。

P-17：2007 年の会計報告です。詳細は別として、収入が 130,090 ドル、支出が 144,419 ドル、損失が 14,329 ドルとなっています。

☆過去の保留金があるので単年度の予算としては問題ないと思います。

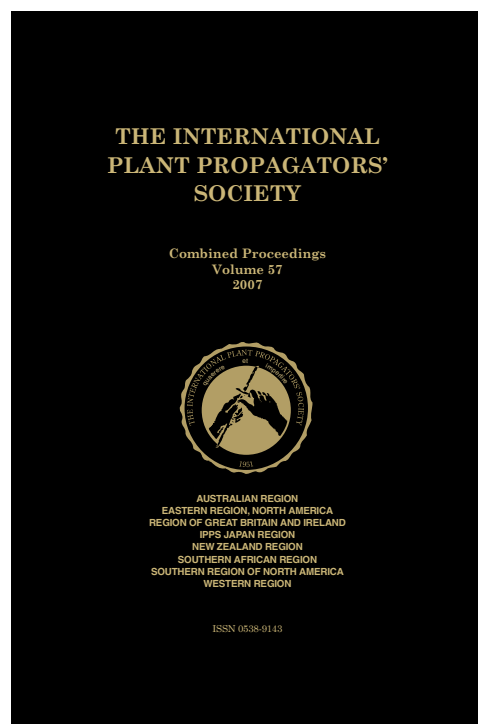
☆以後 42 ページまではインターナショナルのメンバー各支部の役員、各支部での年次集会の発表課題の一覧などが記載されています。

☆ 43 ページからは各支部で発表された研究論文が掲載されていますが、それに先立ち 711 ページに飛んでください。2007 年宮崎大会の記事です。記憶が蘇ってきます。和文の発表要旨をお持ちかと思いますが、同じ内容のものが英語になったので題名だけ訳してみます。

P-713：大西隆氏の 'わたしの人生における園芸—それはミニバラの生産から始まった'。

P-714：宮崎大会での見学会の記事を宮崎大学の鉄村先生がお書きくださいました。

P-716：オーストラリアからの参加者の Michael Gleeson 氏によるユーカリの一種である 'Corymbia ficifolia の新しい接ぎ木方法' です。この植物は従来種子で繁殖されていたのですが、新しい接ぎ木方法を開発しました。



ブラックブック 57 巻 (2007 年)

☆ Gleeson 氏は、このニュースレターのなかに 'メードインジャパン' という題で宮崎での年次大会の印象を書いています。ご覧になってください。

P-721：加藤・雨木氏によるニンニク鱗片切片を用いたのマイクロプロパゲーション。

P-725：石井・谷口・坪村・近藤氏による花粉症解決のための雄性不稔スギの組織培養。

P-727：仁藤氏による日本の古いカンキツ品種を楽しもう。

P-728：富田・遠藤氏による低毒殺虫剤としてトウガラシを用いる。

P-735：山本・平尾氏によるキキョウの子葉と胚軸切片からの不定的シュート形成による植物体再生。

P-45：デンマークの J. H. Selchau 氏による '植物品種特許の歴史的流れと現状' です。植物育種者の権利 (PBR)、植物新品種保護連合 (UPOV)、知的財産権に関連する商業的側面 (TRIPS) などヨーロッパでの植物特許の実情を説明しています。

P-69：E. S. du Toit 氏の 'バイオジェーゼルのための有望樹種'。

近年注目されているバイオジェーゼル生産のために利用される樹種と、プレトニア大学での研究課題が記述されています。いろいろな植物名とその特徴が記載されていますが、71 ページの下に示されている種子中の乾物あたりのオイル含量を記しておきます。

<i>Jatropha curcas</i>	55-60%
<i>Moringa oleifera</i>	30%
<i>Ximenia caffra</i>	65.7%
<i>Pappea capensis</i>	75%

P-75：南アフリカにおけるトルコギキョウの栽培方法の検討。

南アフリカでの生産体制を確立して出荷している。

P-83：水質汚染と農業用水の使用規制。

政府高官が生活用水、農業用水、工業用水の規制について解説した。

P-92：組織培養によるオランダカイウ (カラー) の大量増殖法。

MS 培地に BA を 0.5ppm 添加して大量増殖し、ウイルス検定後に出荷する。この植物は、増殖や栽培に手間はかかるが、花の美しさと市場での価格は良いので、'bitter sweet crop (苦しくもあり、楽しくもある植物)' と評価しています。

☆ 97 ページからは 2007 年 4 月 26 日から 29 日に開催された第 36 回ニュージーランド支部の発表です。14 課題の発表がありました。

P-97：環境保全のための植生再生。

著者の Hatch 氏は 1963 年にニュージーランドに移民してきたのですが、その前のイギリス時代にカバノキの植林をされていて、自然保護のための植林の経験があるようです。ニュージーランドでは 98 ページに示すような植物を用いて植林再生の検討を行おうとしています。植物名をすべて確認できませんが、サルトリイバラ、チドメグサ、イボクサアヤメ、トベラなどの仲間の植物があげられています。

P-99：海岸の砂防植物として在来種の *Spinifex sericeus* の採取と種子の取り扱い。

*S. sericeus* という植物の和名は確認できませんが、オーストラリア、ニューカレドニア、ニュージーランド在来の匍匐性の雌雄異株の植物のようです。いろいろな系統があり特性が多様で、種子の 1000 粒重の平均が 13.4g です。海岸の砂防植物としての利用を検討しています。

P-111：植生再生のための在来植物の利用。

植生再生のための植物材料を提供しているナーセリーからの報告です。ニュージーランドの資源再生法と京都議定書が後押しとなり、この分野での販路が広がるだろうとの見解です。

P-114：Stockton 炭坑の植生再生。

P-116：植生再生に用いられる植物と繁殖方法が示されています。

☆以上 3 課題の発表は、環境保全、植生再生のための野生植物を利用しようと試みているものです。IPPS メンバーがこのような分野で活躍できることは興味深いことです。また、オーストラリアやニュージーランドには未利用の植物が多くあり、その園芸的利用についても検討している事がうかがわれます。わが国との自然環境の差、文化の違いを感じます。このような違いを知ることも IPPS メンバーのメリットだと思います。

P-126：植物成長を制御するための温室の利用。

光、温度、湿度の制御が植物の成長にどのような影響を及ぼすかの解説。

P-134：苗木生産の熱供給源に火山からの温水を用

いる。

火山からの温水を温室の暖房、露地での霜よけ、事務所の暖房、土壌消毒、種子処理と乾燥、利用状況の広告などに用いる。利用にあつては法律、健康、安全性、温度のコントロール、供給パイプの周辺の温度差、コストなど種々の問題点があり、今後の検討が必要。

P-137：繁殖の問題点、既に試したか？

カラント、グースベリー、ブルーベリー、イチゴ、ハーセルナッツ、堅い毛に覆われた葉や茎をもつ植物 *Leucadendron argenteum* (ギンヨウジュ) などの繁殖方法の工夫を記載しています。発根困難樹種には取り木が安定的である。

P-144：植物展示ハウスの病害虫除。とくに Fernery and Display Houses.

Fernery and Display Houses はニュージーランドの北島の西海岸にある 1000m<sup>2</sup> のハウスと育苗圃をもつ展示用の温室で、25,000 種の植物がポットで栽培され、年間 30,000 人を超える見学者がある。多様な植物種維持のためには複雑な病害虫防除の戦略が必要。148 ページの表に発生しやすい病害虫 (左のカラム) と防除方法 (右のカラム) が記載されています。

P-151：フラスコから上手に植物体を取り出す。

試験管内で大量増殖された植物体をいかに効率よく馴化し製品にするかを検討した。馴化に影響を及ぼしている要因は、湿度、光の強さ、温度、培地組成、pH などである。

P-155：世界のためにパイナップルリリー (*Eucomis comosa*) (ユーコムス) を栽培する。

著者の Welsh 氏は、1995 年にオークランド植物園に栽培されているユーコムスのうち南アフリカから導入した系統から数百の種子を採取し、栽培を始めた。日本からの訪問者がこの植物の美しさに魅せられ、5,000 株の提供を申し出たので確実に購入することを約束し、栽培を開始した。1998 年からは、選抜事業を開始し、北半球に向けて世界的に販路拡大を図っている。

*E. comosa* はアフリカ南部原産で高温湿潤を好む植物であるのでそれに合わせた栽培管理が必要。156 ページの写真は、切り花用の系統。158 ページの第 3 図は、分球と株分けによる繁殖。第 4 図は、球根、子球、鱗片からの選抜。第 4 図は、葉とほう (苞) 葉。

P-163：繁殖の材料は、はじめから権利を得ること。苗木生産者は、美しく水々しい植物体を繁殖して供給することが必要である。そのためには生産者が責任を持って良い母本をもつことが必要となる。第一には、良い土地を手に入れ、栽培管理をしっかりすることが大切である。そのことにより省力、高い発根力、高収入などが可能となる。

P-166：交雑により新しい品種を開発し選抜するための最近の経験。

Hooper 氏は、民間育種家です。写真を参照してください。第 1 図は、ヒカンザクラ 'Red Vale' と 'Okame' の交配からの雑種。第 2 図は、サクラの交配実生の育成状況。第 3 図は、モクレンの 'Sweet Simplicity'。第 4 図は、'Sweet Simplicity' と *M. liliflora* 'Nigra' との交配による 'Genie' で花色は赤。この組み合わせでは多数の優良系統が期待できる。第 5 図は、育種のための発芽床。第 6 図はポリエチレンマルチ圃場での 1 年生苗木。第 7 図は、サクラの接ぎ木苗木育成。これらの新系統の育成には 20 年を要した。モクレンの黄色、濃い朱色、ブルーなどを目指す。

P-175：針葉樹の栽培と繁殖。

Cedar Lodge Nurseries は 30 年前に興味として仕事を始め針葉樹専門の業者となった。針葉樹類は植物の中でも種類が多く、熱帯地域から南極に近いところまで広い分布をもつ。繁殖の仕事は病害虫との争いであり、本論文では病害虫の防除について述べられている。

☆今回は南アフリカとニュージーランド支部報告を載せました。地域により植物材料に関する考え方が異なり、興味がそそられました。前回のアメリカの記事の時もそうでしたが、世界中には未利用の植物がまだ多く残されていることを痛感しました。わが国の園芸の発展のためにも、このような情報を知っておくことが大切かと思えます。訳は十分ではありませんが、さらなる情報が必要であればお知らせください。

## 特別寄稿

## 日本園芸見聞録 “Made in Japan”

## IPPS — Jで日本の種苗会社を訪問

オーストラリアリージョン Michael Gleeson



2007年11月に宮崎で開催されたIPPS-J年次大会にオーストラリアリージョンのMichael Gleeson氏が参加し、この内容を“Australian Horticulture”誌に掲載されました。日本支部のニュースレターにも載せ多くの人に読んでいただきたいとの要請がありましたので日本語訳を付けて掲載します。

11月に開催されたIPPS—Jの年會に招待講演者として参加し、日本の種苗会社をいくつか訪問しました。そこでの見聞をここに記してみます。

私が参加した場所は日本の南の島の九州にある宮崎県です。この地域の気候は、日本の南を流れる黒潮に影響を受けるため温暖です。夏の気温は非常に高く、35℃を越え、さらに高湿です。旅行中、バナナ、ハイビスカス、ブーゲンビリアが戸外で育っているのを見て驚きました。



図1. 宮崎の海岸での熱帯植物

## 日本グランドカバー株式会社

日本グランドカバーは、西都市にあり、5haの土地を有し、15人の従業員が働いていました。販路と営業範囲は日本全体に広がり、高い評価を得ています。すべての植物の繁殖は、温室内または戸外においてこの会社で行われています。植物はポット栽培され、地植えのものはありません。鉢用の土も会社で生産され、ピートモスと、ちょっと見慣れない、見た目はパーライトのような砂との混合物です。夏期の高湿と高湿により病気の発生があります。対策として、植物体の周辺の通気をよくするために、植物体は、コンクリートブロックの上に敷いた金網の上で管理されています。



図2. 日本グランドカバーでの戸外での生産

植物は身近なものが多く、アベリア、アガパンサス、コルジリーネ、コトネアスター、フィカス、ヘデラ、ランタナ、ラベンダー、ニューサイラン、ローズマリー、ストレチア、シコンノボタン、テイカカズラ、クライミングミニローズ、いくつかのグランドカバーコニファーがあります。とくに興味深かったのは、支柱を使ったよじ登るような仕立て方でした。この仕立て方で緑のスクリーンができています。また、ハンギングバスケットで育てたテイカカズラ (*Trachelospermum jasminoides* と *Trachelospermum* “Tricolour”) もおもしろいと思いました。



図3. 通気をよくするためのコンクリートブロック上の金網



図 4. 植物によるインスタントのスクリーン

### 信光緑産

この種苗会社は三重県鈴鹿市の家族経営会社です。1ha がコンテナ栽培、3.5ha が露地栽培で合計 4.5 ha です。10 万本の植物体を保有し、周年 30 種の植物をカタログに掲載しています。生産現場は、わずか 4 人のスタッフで、2 人の男性職員は力のいる仕事をし、2 人の女性は比較的軽労働を担っています。全体の管理とビジネスは、服部信好氏が行っています。服部氏は、生産物の 70% を近在のガーデンセンターに、15% を他の地域に、そして 15% を造園業者に販売しています。造園用の材料は、丸く刈り込んだカイズカイブキで、地下部は麻布で包んだ根玉を付けて販売しています。

### 有限会社 綾園芸

この種苗会社は、宮崎県にあり、21ha（本当は 2.1ha）を有しています。約 3 年前（本当は 1990 年）に開業したばかりの新しい会社です。元々のビジネスは、15 年前（本当は 1978 年）に神奈川県で開業されましたが、資産売却益や借金などを利用し、比



図 5. 綾園芸でのダイヤモンドリリー

較的安い土地が広く得られる宮崎県綾町に新しい圃場を開設しました。栽培のための施設は新しく、技術的にも最先端です。綾園芸は、母の日のカーネーション、切り花として高価なランキュラスやダイヤモンドリリーなどの贈り物用の花卉類に的を絞っています。職員の方々は、IPPS ロゴ入りラベルの付いた地場のビールとワインを用いてすばらしいバーベキューで IPPS のメンバーをもてなしてくださいました。

日本の種苗会社は、私が考えていたよりかなり小規模なので驚きました。今回訪問した種苗会社は、オーストラリアの種苗会社に似ています。会社組織の種苗会社もありますが、多くは、小規模の家族経営です。オーストラリアでも問題になっているコストの増加、輸送費の高騰、利益の減少などは日本でも同じ状況であり、相互に意見交換ができました。

とくに興味をもったことは、オーストラリアにおける植物検疫の問題です。日本の生産者の方々には、オーストラリアの厳しい植物検疫の理由を理解してもらえません。‘病害虫がいたとしても日本には既に存在していたものです’と言われたのですが、これが日本の状況かも知れません。対象とする害虫はなるべく少ない方が良いのだと説明しましたが、わたしが話した生産者の方々は、販路と販売の減少に興味があるようでした。病害虫はいかようにも防除できるので販売の確保の方が重要だとの考えのようです。

一般用園芸資材のかかなりの量が、露地で育てられ、根玉を包んで売っていることに興味をそそられました。これらの植物は農家から提供された休耕田を使って栽培しています。日本での植物の価格はびっくりするぐらい安く、販売経路は複雑で 5 段階ぐらいの業者の手を通して販売されています。他の日本円獲得の産業の競争は激しいものがありますが、日本の種苗生産界は、ほどほどの生活を送れるような状況です。今年初めに南アフリカを訪問したのですが、その種苗生産界は国際競争にさらされていました。

この度の日本訪問で、オーストラリアの種苗生産は世界一で日本の業界より進んでいることを確認しました。しかし、この報告の中で述べたように新しい考え方も学びました。オーストラリアの皆様が日本を訪問する機会があれば、日本の生活を身近に感じてください。日本は本当に興味深い国です。

追記：①この記事は“Australian Horticultural”誌と著者であるオーストラリアリージョンの IPPS メンバーの Michael Gleesson 氏の許諾のもとに掲載するものです。

②訳は、主として仁藤が行いましたが、一部不明な点、誤認などがありましたので宮崎大学鉄村先生にご助言をいただき、確認しました。

# 会員紹介 コーナー



(株)ベルディ  
代表取締役 水谷朱美さん

わたしが IPPS に入会したきっかけは、第2回宮崎大会への参加です。会員歴は長いのですが、長いこと幽霊会員をしておりました。一昨年の第14回宮崎大会に参加し、活動再開となりました。昨年5月にはニュージーランドでの国際理事会に代理参加をし、生涯忘れられない経験をすることができ、とても感謝しております。

私の会社を紹介します。株式会社ベルディは、1975年(S50)に肥料等を扱う園芸資材店として開業しました。1982年(S57年)にメリクロン苗事業を立ち上げ、現在に至っております。メリクロン苗事業を始めるきっかけは、父である先代社長杉浦豊作が、視察で訪れた兵庫の試験場で試験管に入ったカーネーションの苗を見たことからでした。「試験管内植物」に強い興味を持ち、培養について何の知識もない青シソ栽培農家が一念発起して培養室を作り、仕事が始まりました。農家は、「良い種苗」を何よりも必要としている。良い形質を持った親株からメリクロンでコピーした苗を作れば、自ら育種しなくても苗屋として成立すると考え、種苗会社や農協、個人農家と様々なところから持ち込まれる植物を培養して

います。事業所は、市内に3ヶ所のメリクロン苗生産工場(写真1)と3ヶ所の馴化・育苗農場、農場併設の事務所(写真2)です。

培養生産品目であるサツマイモは、種芋をメリクロン苗に置き換えてツルを採ることでイモの色が鮮やかになり、表皮がきれいで、貯蔵性と収量が上がりました。徳島県の「鳴門金時」や関東地方で主に作られる「紅東」を中心にメリクロン苗が使われています。イチゴでは、これまで原々種苗のみを販売してきましたが、愛知県試験場と共同でセル(プラグ)苗での定植用苗の試験をしており、今年の夏から試験販売を始めていきます。

農場では、農薬散布履歴表示の義務化に伴い、病害虫管理の強化に取り組んでいます。粘着板(写真3)や粘着ロール、微生物農薬等を導入してより効果的な農薬管理ができるよう取り組みを進めています。

最後に、来年は、豊明市場を会場に愛知での第17回大会が予定されています。知多半島コースと渥美半島コースの2つの見学コースができるよう、多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。



写真1. 天伯工場(愛知県豊橋市)



写真2. 事務所(愛知県豊橋市)



写真3. 馴化種苗農場(愛知県豊橋市)

IPPS-J 第七期理事・監事・役員・理事代理名簿  
(2009.1.1 ~ 2010.12.31)

	役職	氏名	会社・所属
1	会長	内田 恵介	グリーンクラブト
2	副会長	鉄村 琢哉	宮崎大学
3	副会長	鈴木 隆博	(株) 浜松花き
4	事務・会計理事	南出 幹生	南出 (株)
5	編集理事	富田 正徳	(株) アイエイアイ
6	国際理事	仁藤 伸昌	近畿大学
7	理事	大橋 広明	愛媛大学農学部
8	理事	佐藤 伸吾	(株) 花街道
9	理事	藤森 忠雄	(株) 赤塚植物園
10	理事	水谷 朱美	(株) ベルディ
11	監事	柴田 勝	(株) 王健
12	国際理事代理	Peter F.Waugh	Carann
13	国際交流推進委員	大森 直樹	(株) 山陽農園
14	年史編纂委員	武田 恭明	近江花学研究所
15	理事代理	青山 兼人	兼弥産業 (株)
16	理事代理	石井 克明	森林総合研究所 森林バイオ研究センター
17	理事代理	遠藤 弘志	揖斐川工業 (株)
18	理事代理	弦間 洋	筑波大学 大学院
19	理事代理	速水 正弘	静岡県西部農林事務所



写真1. シンジュヒメ



写真2. ウェディングブーケ



写真3. (株) 村田製作所 野洲事業所

編集後記

第16回IPPS-Jの「滋賀大会」ちかづく

4月の声を聞くと、当社の園芸関係の仕事はピークに達します。また、中旬になると、当社の農場や売店ではシャクナゲの花が沢山咲き始めます。

25年程前からシャクナゲの育種もしてきました。種苗登録したうちの2品種を紹介いたします。シンジュヒメ(真珠姫)[写真1]とウェディングブーケ[写真2]です。どちらも花色がピンクから白花に変わる日本人好みの花です。当社の最高傑作です。

下旬には(株)村田製作所の野洲事業所[写真3]と八日市事業所へシャクナゲ見学に行きました。この会社は工場緑化にシャクナゲを沢山使用して、地域の住民に開放しています。どちらも企業の工場緑化とは思えない、本格的な素晴らしいシャクナゲ園です。機会がありましたら是非とも見学されることをお勧めいたします。両工場共に財団法人都市緑化基金が認定する「SEGES」の2008維持認定を受けています。

第16回IPPS-Jの滋賀大会が迫ってまいりました。沢山の会員の皆様にお集まりいただき、親睦を深めると同時に情報の交換をしたいと思います。

どうぞお誘いあわせの上、沢山の情報を持参の上、お集まりください。

皆様にお会いできることを楽しみにしています。

ニュースレター担当：藤森忠雄

ニュースレターへの原稿大募集

会員相互の情報交換の場として、このニュースレターをご利用下さい。

気軽に投稿して頂ければ幸いです。No.36号よりカラー印刷になりました。

宣伝効果も絶大です。ご投稿を心からお待ちしております。

原稿は原稿用紙への手書き文章は勿論 CDでも、Eメールでも受け付けます。写真も大歓迎です。原稿の内容は1ページ当たり1,000字+写真2~3枚です。必ず顔写真をお忘れなく。

受付窓口

〒514-2293

三重県津市高野尾町1868-3

(株) 赤塚植物園 藤森 宛

TEL 059-230-1234

FAX 059-230-7880

E-mail ffctf@akatsuka.gr.jp